



リフレッシュプログラム in 京都

●岡 佑里子 (京都YWCA)

今年も京都 YWCA でリフレッシュプログラムを開催し、EIWAN から3組の親子(フィリピン女性とその子どもたち)をお迎えしました。8月4～8日の期間中、京都は連日35度を超える猛暑。そんな中でもプールに行ったり、宇治の山間の古民家で川遊びをするなど、涼に親しむプログラムとなりました。

宇治の古民家では、初体験が2つ。

①寝袋で寝る!

初めて見る寝袋に子どもたち3人は入ってみる(暑いのに!)、入ったままミノムシのように動いてみるなど、興味津々。ひとしきり遊んだあと、夜は寝袋を下敷きにしてそのうえで爆睡。

②スイカ割り!

大きなお庭でスイカ割り大会。タオルで目隠しをしてスイカを割る棒に頭をつけて3周クルクルとその場で回り、みんなの掛け声を頼りに5メートルほど離れたスイカまでGo! これがとっても難しくてなかなかスイカが割れない。空振りを何度も繰り返してやっと割れたスイカにかぶりつきました。



▲スイカ割り!

お楽しみの京都観光は、10円玉に描かれている宇治の平等院、2年連続で「行ってよかった、外国人に人気の日本の観光スポット」第1位に選ばれた伏見稲荷大社、そして時代劇が多く撮影されている太秦映画村を満喫しました。太秦映画村では子どもたちは水の迷路でびしょびしょになったり、お決まりのお化け屋敷で絶叫。お母さんたちは「暴れん坊将軍」に出てきた白馬に乗ったり、時代劇のイケメン武将と写真を撮ってもらったりで大満足のようでした。

ちょうどこの時期、京都は夏の観光シーズンで、幸運にも宿泊したホテルの目の前で開かれていたイベント「京の七夕」で、めったに見ることができない舞妓さん・芸妓さんの踊りを見ることができ、ツーショット写真も撮らせてもらいました!



▲舞妓さん・芸妓さんと

あっという間に終わった4泊5日間の京都滞在。「まだまだ京都にいたいよー」と、うれしい感想を残して福島に戻っていかれました。ぜひ、また来てくださいね。

りえさん (小学6年生)

♡今回のバスツアーでまず、ねぎそばがおいしかったです。最初はネギで食べるのはむずかしそうだったけど、やってみると、ちょっとかんたんでした。♡次に、交流会が楽しかったです。いつも同じ人で止まったこと [注: 罰ゲームで歌わされたこと] が、おもしろかったです。♡次のバスツアーでも、泊まりたいです。

ヴィエットさん (ベトナム) *今月末に帰国

♡初めての事がたくさん体験できました。大内宿で綺麗な屋根を観ました。綺麗な写真もたくさん撮りました。ねぎそばが美味しかったです。♡分校で、皆さんと一緒に食事して、いろんな国の食事文化の勉強になりました。楽しかったです。皆さんと交流した時にいっぱい笑いました。朝、分校の周りの散歩で自然の光景は良い気持ちでした。♡今回のバスツアーで新しい雰囲気が出来て、いろんな事が勉強出来ました。EIWANのスタッフの皆さん、面倒を見て下さって感謝しています。一緒に行った皆さんも、楽しい時間をありがとうございました。

マリセルさん (フィリピン)

♡とても素敵な旅でした。訪れた場所、出会った人々、食べ物、さわやかな自然。どれも皆、すばらしかったです。参加したほかの人たちも、一緒にご飯を食べたり、お酒を飲みだり、いろいろなことをおしゃべりした、この2日間の旅を大いに楽しんだと思います。期待していた以上に楽しかったです。このツアーを企画していただき、ありがとうございました!



◆編集後記◆

- 「リフレッシュサポート」/「311 受入全国協議会 保養促進ワーキンググループ」がまとめた『原発事故に伴う保養実態調査—調査結果報告書』(2016年7月)によると、2014年11月からの1年間で①234団体が保養を実施し、約15,000人以上が保養に行ったこと、②29都道府県で実施されていて、ほぼ全国で受け入れ活動がされていること、③開催団体の69%が任意団体であり、有給スタッフを持たない団体も69%となること、④保養のみ行っている団体の収入の割合は寄付金71%、助成金15%、自治体の補助金1%、参加者の参加費4%となること、⑤主な改善希望点として「国や自治体で保養をやってほしい」という要望が突出していることなどが指摘されている。つまり保養プログラム

の多くは、資金不足・人手不足の中で、任意団体によるボランティア活動として、何とか継続されている。

- 同報告書では、共働き世帯やシングルマザー家庭などでは依然「保養に行きにくい」問題点の現状も指摘されているが、それは移住女性も同様である。さらに移住女性の場合、保養情報になかなか辿り着けないという問題もある。
- 今夏、私たちは幸いにも3つの保養プログラムを実施/支援することができた。とくに「あいあい自然キャンプ in 紀伊田辺」では、「さよなら原発の会」につどうカトリック教会の神父・シスター・信徒たちの尽力に、心から感謝したい。

●佐藤信行

福島移住女性支援ネットワーク (EIWAN)

〒960-8055 福島市野田町2-3-2 神野ビル3F東 (JR福島駅西口から徒歩7分)

電話 080-8215-1556 メール eiwan311@gmail.com

ホームページ <http://gaikikyo.jp/shinsai/eiwan>

フェイスブック <https://www.facebook.com/eiwanfukushima>

送金先 郵便振替口座番号: 00920-0-144820

口座名称: 福島移住女性支援ネットワーク

あいあい自然キャンプ in 紀伊田辺

◆7月27日～8月3日／主催：さよなら原発の会◆

福島原発事故から5年が経過し、当初、日本全国で始まった数多くの保養キャンプが、人手不足や資金難から縮小されたり、廃止されたりしているのを知った《さよなら原発の会》は、何かしなければとの思いに駆られて保養キャンプを企画したが、その実現には多くの困難があった。

しかし、カトリック大阪大司教区の《子ども基金》や《えんご》の支援、また多くの方々の善意に包まれ、特に紀伊田辺教会の全面的な協力をいただいて、福島県の須賀川市、いわき市から子ども9人（小学生8、幼児1）とその保護者4人（中国女性）を迎えることができた。

7月27日（水）

- 福島空港から定刻通りに伊丹空港着。出迎えのスタッフ2名と共にレンタカーで紀伊田辺へ。
- 小休止、荷物の整理をしてから、キャンプについてのオリエンテーションがあり、18時過ぎに夕食（子どもたちはカレーに大喜び）。教会には入浴設備がないので、温泉へ。

7月28日（木）

- 8時の朝食後、扇が浜（教会の前の海水浴場）で遊ぶ。イルカを身近に見たり、海で泳いだり、日差しが強かったが浜辺で元気に過ごす。
- 午後は屋内でそれぞれが好きなことをしてゆっくり過ごす（ぴょんぴょんガエル、ブンブンごま、多面体の作り方をスタッフに教えてもらう）。
- 夕刻、テントに寝泊まりしながらアジアを巡っているポーランドからの若いカップルが来訪。夕食、温泉を一緒に楽しむ。夜、このカップルがポーランドの歴史や自分たちが住んでいる町の様子、食べ物、有名人などのDVDを見せてくれる。子どもたちは興味深く鑑賞していた。

7月29日（金）

- 朝食後、《天神崎》で磯遊び。潮時もなく（干満のちょうど中頃で、しかも長潮）、磯は広がっていた。スタッフの一人の父君が来られ、《釣り》をさせてくださる。キタマクラ、ベラ、ネブツダイ、フグなどがたくさんかかり、小さなバケツ一杯になる。何匹つれたかを競い合い、子どもたちは大喜び。
- 午後は近くの市立図書館へ出かける。子ども向けの蔵書もたくさんあり、宿題をしたり、本を読んだり、

親も子どもも大満足。

7月30日（土）

- 遠くから見ると、ヒキガエルの群れが天を仰いでいるような面白い形の岩山。そこにある《国民休養村》で開かれた自然観察会に参加。プランクトンのプレパラートを作って、観察し、先生の話聞く。
- 帰途、近くのスーパーで母親たちはお土産の梅干をたくさん買い込む（自分たちの留守の間、世話になった人へのお礼）。
- 教会の人たちが企画したバーベキューに招待される。ちょうど、白浜の《花火の日》で、8時から9時前まで、歓声を上げる。

7月31日（日）

- 日曜日だったので、午前中は母親の責任で行動してもらう。
- 3時半過ぎに、日置川志原海岸へ。平坦な磯で丸く平べったい石を拾ったり、《水切り》をしたりして遊ぶ。タカラガイだけではなく、不思議なかたちの流木を拾った子どももいて、福島へのお土産ができた。
- 浜辺に建つ温泉に入り、夜は昨夜の花火やプランクトンの顕微鏡写真を大きく投影して、自分たちのデジカメ技術(?)を楽しんでいた。

8月1日（月）

- 少し遠かったが、すさみ町にある《エビとカニの水族館》へ。見たこともないカニやエビに子どもたちは夢中になっていた。
- 近くにある《童謡の園》で昼食。眼下に広がる澄み切った海を眺め、健脚な子どもたちと母親は浜辺まで下りて遊ぶ。
- そこから名所の一つ《三段壁》を眺め、子どもたちに《大人気》だった温泉に寄って帰る。
- 4人の母親たちが夕食づくりを申し出てくれたので、夜は中国料理。一緒に餃子を作る。
- あと1日残ってはいるが、子どもたちはキャンプの感想を書く。
- 夕食後、子どもたちは庭で花火を楽しむ。

8月2日（火）

- 山から落ちた岩がごろごろしている《奇絶峽》に行くことは安全面から憚られたが、子どもたちは大喜

びだった。《備長炭の里》を訪ね、炭焼きの歴史や炭のことを知る。

- 午後、子どもたち、母親、スタッフ一緒に分かち合いをする。
- その後、福島に帰る準備をし、最後の温泉に行って、全日程を終える。病気になることも、怪我もなく、ずっと天候に恵まれて楽しい日々だった。

8月3日（水）

- お別れの朝、さよならを言う時の子どもたちは悲しそうだった。「また、来年も来たい。いろいろ初めての体験ができたし、できればまた来たい」と言いながら、バスで出発。そして伊丹空港から福島に戻った。



夏の1泊リフレッシュバスツアー

◆8月27～28日／EIWAN◆

8月27日、福島駅前を出発したバスは、途中で白河の仲間たちと合流して会津へ。総勢33人（そのうち小学生が8人、高校生1人）。福島と白河の日本語サロンの学習者とその家族、サポーターたちである。

EIWANでは例年、春と秋に日帰りバスツアーを実施してきたが、「ぜひ一泊の旅をしたい」という参加者の強い要望に応じて、運営委員が知恵を絞りながら「低予算」の一泊ツアーを準備した。

参加者の国籍がフィリピン、中国、韓国、ベトナム、ジャマイカ、日本という文字通りの多国籍・多文化バスツアーの最初の目的地は、大内宿。これは17世紀半ばに、会津と日光を結ぶ下野街道の宿場町として整備されたもので、江戸時代のたたずまいが残されている。その歴史的意義に耳を傾けるいとまもなく、参加者は「ネギそば」に挑戦。それぞれが見よう見まねでネギを手にもって蕎麦を口に入れていき、どのテーブルも爆笑。そのあと急坂の階段を上って、雨に煙る藁葺屋根の宿場を展望する。

次の目的地は、新潟県境の只見町にある深沢温泉。湯舟では、それぞれの母国／故郷の「お風呂文化」を談じて尽きない。そして夕方、「森の分校ふざわ」に到着。ここは小学校が廃校になったあと、体験学習施設としたもの。近在のお母さんたちが地元の食

- スタッフからのメッセージとして、「私たちにありがとうではなくて、『ご恩返し』を身近な人たちにしてほしい」と伝えた。

*さよなら原発の会『あいあい自然キャンプ2016年報告書』から抜粋しました。



材で作ってくれた「これぞ日本の田舎料理」を堪能する。食事のあとは囲炉裏で、餅の代わりにマッシュマロを焼いてみたり、交流会では自己紹介のあと、全員が輪になってゲームに興じた。ゲームでは罰として、それぞれの国の唱歌を歌うことが課せられ、子どもも、また大人も「小学生」に戻って、爆笑するうちに、心も体もリフレッシュしていった。

翌日午前、バスは山間を縫いながら白河に向かった。正午、白河サロンに来ているフィリピン人女性とその夫（韓国人）が営んでいる梨園に到着。そこにはバスツアーに参加できなかった白河サロンのフィリピン人たちも合流。まず熟した梨の見分け方、取り方の説明を受ける。農園の中を子どもたちは歓声を挙げながら駆け回り、例年より早く実った梨を口一杯に頬張る。そしてバスは、白河駅—福島駅へと。

——このようにして1泊2日のバスツアーは無事終了。日ごろ仕事や家、そして日本語サロンで奮闘している彼女ら彼らにとって、つかの間の休息になっただろう。私たちサポーターにとっても、学習者の夫や子どもも参加した1泊2日の旅は、日本語サロンでふだん接する彼女ら彼らとは違った面（母親や妻としての側面）も垣間見えて、楽しいものであった。